日本陸軍最後の操縦訓練の記録

元陸軍少年飛行兵第17期（甲種）
大橋　健一

はじめに

戦いの敗色濃くなった昭和20年2月、熊谷陸軍飛行学校が閉鎖され、私は立川航空廠へ転属となる。

もはや飛行機に乗る夢も遠退き、来襲する米機B-29や戦闘機を迎え撃つための対空射撃の訓練に明け暮れていた。そんな6月のある日、私は中隊長の命令により「陸軍航空士官学校で操縦訓練を受ける」ために2日間にわたる選抜試験を受けた。

操縦見習士官、特別幹部候補生、少年飛行兵第17期生など数百名。この中から「特幹生26名。少飛生26名」が選抜された。

私もその中の一人として合格。

6月15日朝、中隊長に申告後、我々少飛生26名は空襲を避けるべく遠回りして、正午頃「修武台・陸軍航空士官学校」の正門を入った。この時「貴様たち、たるんどる！　やりなおせッ！」行き違った将校から、いきなり大きな怒声が飛んで来た。

こうした「厳しい歓迎？」に出会った翌日、6月16日から早速訓練が始まった。

訓練編成等

＊訓練の場所：陸軍航空士官学校（現・航空自衛隊入間基地・埼玉県狭山市稲荷山）

＊中隊の名称：操縦研究演習中隊（研演隊）

＊訓練期間：昭和20年6月15日～8月15日（敗戦で終わる）

＊中隊の編成（幹部）

中隊長　梁瀬大佐

幹部教官　岩佐少佐

心理学者　望月文官

操縦教官　中野大尉（特級滑空士・滞空記録保持者）、小林大尉（少飛1期生）、中村大尉

他に操縦教官・下士官助教、計14名（訓練生）

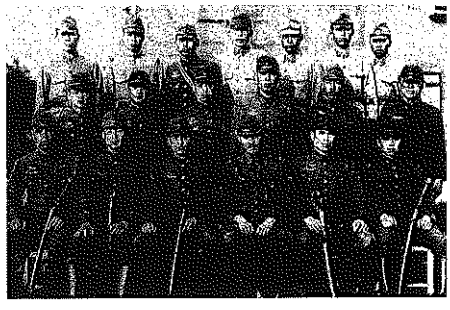
少飛第17期生26名。特幹第3期生26名、計52名を混成、2班に編成

訓練の編成は日本陸軍初めての「画期的な編成」と言われた。その特色として次の三つがあげられる。

(1) 操縦訓練の教官スタッフに初めて「心理学者（文官）」が就任。文官による「心理テストの結果」を活用して「完全な個別化教育」を実施。その効率化を実現した。

(2) 操縦教官と助教17名で、訓練生52名を訓練・教育した。訓練生3名に教官1名という贅沢さだった。

(3) 訓練生52名の中隊長が陸軍大佐。当時の航空本部（または航空総監部）がこの操縦訓練を如何に重視していたか、一目瞭然である。



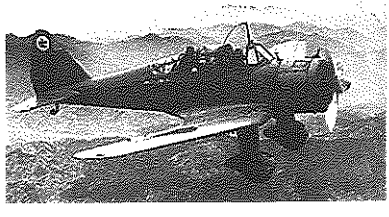
幹部教官：前列向かって左から中村大尉、中野大尉、岩佐少佐、望月文官、小林大尉

訓練開始

いよいよ訓練が始まった。まず、中野大尉の指導で、中級グライダーの滑空訓練から始まった。長い鋼索をウインチで巻き上げる。10メートル、20メートルと上昇、訓練内容に応じた高度になると鋼索を外して滑空する。

第1班は、直線滑空で、操作・高度・速度など空中感覚を養った。「陸軍四式基本練習機」通称「ユングマン練習機」の操縦訓練を開始した。

第2班は、直線滑空終了後、最高難度の課目「定点着陸」に進んだ。この頃になると、グライダーが実に快適な乗り物だと知り、楽しむ気分になる。「九九式高等練習機」の操縦訓練開始。



陸軍航空士官学校の九九式高等練習機
（写真：ウィキペディア）

グライダーの滑空訓練に並行して望月教官により各種の心理テストが実施された。紙面一杯に並んだ数字を足したり、引いたりして答えを書く。その際、文官は、ある時は静かに見守り、ある時は話しかけてテストの邪魔をする。更には、特定の個人に話しかけることもあった。

こうして訓練生一人一人の特徴や性格「強く刺激する方が成長が早い生徒」「自主性に任せる方が良い生徒」「時に褒め、煽てるのが良い生徒」などを把握していた。このテスト結果を活用して、訓練生の個性に合わせた「徹底した個別化教育による操縦訓練」が実施された。

こうした指導、教育のためには、知性、忍耐、自制などを兼ね備えた指導者が必要であり、そこでこの指導、教育に適した優れた操縦将校や下士官が選び集められた。

操縦訓練については、私は第2班に所属し、中級グライダーでの「定点着地」の課題を終えて、九九式高等練習機の操縦訓練を受けた。

慣熟飛行では、小林大尉の操縦機に同乗し、「今日は天気も良いぞ、初飛行を十分楽しめ」という教官の言葉どおり、練習機は快晴の空へ飛び立った。

上昇して第一旋回、第二旋回をして暫く飛ぶと、眼下に入間川が見えた。明るい太陽に映えて、清流が印象的だった。「この景色は一生忘れることがないだろう」。長い間、憧れ夢に見た「飛行機に乗った」のだ。教官操縦の初めての「慣熟飛行」だが、この日を目指してきた甲斐があった。

「よしッ！　明日から頑張るぞ！」

この頃、硫黄島から飛来した米戦闘機P-51ムスタングが、武蔵野の地に点在する飛行場を次々に這うような低空飛行で襲ってきた。操縦訓練はその合間を縫って実施されたが、狼煙の煙が上がると大急ぎで着陸、掩体壕に突っ込み避難する。

心理テストの結果からか、小林大尉や助教の佐藤軍曹から、怒鳴られたり、悪罵されることもなく、不愉快な思いをしたことは一度もない。操縦訓練は快適で楽しくすらあった。そんな教官の指導に応えるべく、私も懸命に励んだ。

エンジンストップで不時着したことがあった。直線上昇中、第一旋回直前、急にエンジンの回転が落ち、やがてエンジンストップ。私はとっさに機首を下げようとグイッと操縦桿を押した。「馬鹿者！　手を放せ！」助教の佐藤軍曹の怒鳴り声。何と言われたのか判らぬまま呆然。乗機は二度左に旋回、隣接する滑空場へ、そこに置かれた囮の飛行機の間を縫って突っ込むように降下した。折から初級グライダーの滑空訓練中だったビルマの留学生がワッと両側に逃げた。その光景に一気に恐怖が走った。乗機は佐藤助教の冷静な操作により、滑空場端の芋畑に突っ込み、無事停止。機体に損傷はなく、我々二人も無傷で事なきを得た。

教官同乗の訓練を何度重ねたか、今となっては不明だが、7月半ばには第1班、第2班ともに、早くも一人、二人と単独飛行を許される生徒が続出し、従来の記録を破る成果が現れた。私もその一人として単独飛行が許された。

7月も終わりに近い頃だったか、米艦載機が飛来するようになった。F6Fが列をなして急降下し、機関砲を連射してきた。格納庫そばの蛸壺壕に退避していた私は一瞬気を失った。至近弾により生き埋めになった。米機が去った後、助け出されたが、感覚がなく、身体中を叩きまくって怪我のないのを確かめた。

以前、立川飛行場でB-29の爆撃にあい、9名の同期生が一瞬にして跡形もなく吹っ飛んでしまったことがあった。私は破壊された防空壕にいたが、怪我はなく生き延びたことがあった。航空士官学校では、前記のエンジンストップと今回の生き埋め。幸運なのか悪運なのか、これで三度目の九死に一生を得たことになった。

2カ月近いこの間に、誰が言うのか、どこから来るのか分からないが、いくつもの噂が立ち、流れ、そして消えていった。「大型のグライダーを操縦して、密かに敵地へ殴り込むための命令が出るのも近い」。また、「葉隠特攻隊が結成される」など、まことしやかに噂された。

航空士官学校の生活環境と訓練環境

生活環境も訓練環境も、当時としては格別に優れていた。

生活環境であるが、まず驚いたのが食事だった。前任地の立川では、毎朝大根の葉にカレー粉を溶かした貧しい味噌汁だった。同じ陸軍なのに、この違いは何なんだと驚いた。ここは航空士官を養成する学校。空中勤務者も多く、航空糧食という特別食が存在する。私たちにもこれに準じた食事で、3食すべてが段違いの豪華さだった。主食の他に、時にチョコレートが、夕食時には元気酒というポートワインが、更にはタバコまで出た。

訓練環境も、広大な飛行場を「研演隊」が独占使用した。グライダーの滑空訓練、飛行機の練習訓練、と

もに飛行場を終日自由に使用できた。整備関係でも、「研演隊」のために、専属の整備班が活動した。

生活環境、訓練環境ともに、当時としては最高だったと思う。

「徹底した個別化教育」の成果と所感

この「日本陸軍最後の操縦訓練」のどこが、何が「画期的」だったのか。

今も昔も、操縦訓練は「教官と訓練生は一蓮托生」で、訓練生の小さな過ちや誤動作で、一瞬にしてともに命を失うことがある。こうしたことから、教官や助教も命がけで、時に殴る蹴るなど暴力ともとれる行為が横行し、それに耐えかねて自ら命を絶つ例もあったと聞く。

熊谷陸軍飛行学校で、不撓不屈の攻撃精神を養うのだと、地獄のような厳しい訓練を私は経験したことがあった。隣の中隊で自殺者が出た。まさにここは鬼の棲み家では、と気を引き締めた。

昭和20年の春、東京や横浜がB29の爆撃で焼けた。戦況は窮迫してきた。すでにガソリンはなく、練習機も少ない。この時期、いかにして早くパイロットを育てるか。この難題に答えを出した賢者がいたらしい。この賢者の計画に沿い、「優れた生徒。優れた教官」を選び集め、知的で、合理的で、効率良い、徹底した個別化教育による操縦訓練が実施された。

陸軍航空士官学校の中でも、この「操縦研究中隊」は特異な存在だった。特筆すべきは、この中隊の雰囲気が、明るく、誰もが楽し気に、懸命に励んだことだ。これは重要な点だ。

この訓練を発案、実施された賢者。更には、空襲の合間という厳しい状況下で操縦訓練の指導をされた多くの教官。幸運にも我々52名は、この快適な操縦訓練を受けることができた。ここで改めて心からの敬意と感謝を捧げ、贈りたい。

私にとっては2年間の少飛生活の中で、唯一納得できる、楽しくすらあった、この2カ月間の日々。今考えても何とも懐かしい。これがこの操縦訓練のすべてだ。

8月15日・敗戦

九九式高等練習機の操縦訓練の最中に、戦い敗れてすべてが終わった。正午に大講堂に集合とのことだったが、すでに校内には不穏な空気があったのか、我々は中隊内で雑音が強い「玉音放送」を聞いた。

大講堂では第3中隊の二人の区隊長が、いきなり抜刀して壇上に駆け上がり、ラジオに切りつけ「この放送は君側の奸の仕業だ」と叫び、徹底抗戦を呼び掛けた。この後、校長の徳川好敏中将以下教官たちは、一室に軟禁された。翌日には厚木基地から海軍機が低空で飛来、徹底抗戦のビラを撒くなど大混乱となる。

数日後の朝、航空神社の前で若い将校（上原大尉）が割腹自殺。同僚の区隊長が介錯した。

私が立川時代の区隊長、古田中尉が機関砲の銃口を胸に、軍刀で引き鉄を押して自決されたのも15日。教え子への遺書を残されたと。

軽挙妄動するな、との禁足令で我々は中隊内に留まり、校内の混乱事態、更にはわが区隊長の自決など、すべて数日を経て聞き知った。

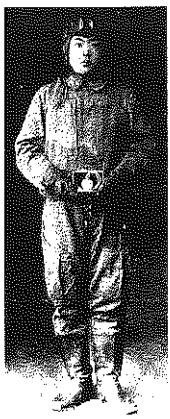
米軍に渡るのを避けるためか「軍隊手帳」を始め、身辺にあるすべての文書類を焼却せよ、との命で連日その使役に従事した。

8月25日限りで、すべての飛行機の飛行が禁止された。このことを知り、密かに格納庫に入り、操縦席の飛行時計を取り外して持ち去る者、操縦席の風防ガラスを壊して持ち去る者、エンジンの始動車に毛布を一杯積んで逃げ帰る者など、耳を疑うような噂が聞こえてきた。

9月1日、復員という別れの朝に教官から最後の訓示を受けた。

「戦い敗れて、我々の時代は終わった。貴様たちとは今日が最後だ。郷里へ帰っても、家を焼かれた者、親兄弟を亡くした者もいるだろう。だが負けるな。これから益々過酷な日が来る。苦しくても負けるな。歯を食いしばって頑張れ。いつかお前たちの時代が来る。その日のために借金してでも勉強をしろ。優れたお前たちならできる。この事を確信して最後の訓辞とする。諸君の健闘と幸運を祈る。終わり」

戦いに敗れ、日本中が焦土と化し、誰もが思考を失った。あの混沌たる中で、80年近い時を経た今も「語り継ぎたい尊い言葉」を残された優れた教官に出会えた、この幸運に感謝せずにはいられない。



（写真：昭和20年夏、操縦訓練時の飛行服姿の筆者。時計は東京陸軍少年飛行兵学校卒業時に陸軍航空総監賞を受賞したときのもの）

復員

この日、私は品川駅から復員列車に乗った。焼け野が原となって何もない東京の街に驚き、疲れたように静かな列車内に戸惑った。昼食時になると、人々は首から下げたズタ袋から煎り豆を出して食べ始めた。

私の昼食は飯盒飯。目の前の子供がじっとわたしを見つめる。そこで気が付いた私はチョコレートを出してその子にあげた。途端に周囲の大人たちが「エエッ！」と驚きの声をあげた。私は未だ気付かぬまま、4人掛けの人々にさらにチョコレートを出した。「こんな珍しいもの、貰っていいんですか…」と顔の前に上げ拝むようにして「何年ぶりだろう…」と。そこで初めて、今世の中にチョコレートはないのだ、と悟った。軍隊の日々、中でも陸軍航空士官学校という特別な塀の中にいた私は、疲弊しきった世間の暮しを知らず、まったくの無知だった。

翌朝、京都駅で下車。乗り換えて田舎の駅で降り、郷里の村を見下ろす堤防に立った。村の西北部がない。B-29の焼夷弾に焼かれたのだ。さらに数日前、八高線の列車が多摩川の鉄橋上で脱線し死傷者が出た。

そんな心配の最中に帰ったらしい。こんなことから、家人は、腫物に触る様に迎えてくれた。

ともあれ、死ぬはずの男が帰ってきた。こうして私の「少年飛行兵」としての2年間は終わった。

追記：わが家に帰って気になることがあった。台湾出身の黄華昌（日本名は広田）と頼泰安（日本名は佐久良）のことだ。帰国の方途なく、まだ航空士官学校に残っているはずだ。二人は大津少年飛行兵学校卒業時、「航空総監賞」の受賞を競った俊才。これから苦難の日々だと推察し、二人の無事を祈るのみだった。

30年後、黄君と再会した。二人は米軍の進駐により航空士官学校を追われ、近くの旅館に住んでいたところ、梁瀬大佐に呼ばれ、長崎の港で台湾行きの船を探し待った。暮らしは厳しく、毛布を始めすべて売り、日雇いで日々をしのぎ、翌年初めに船便を見つけ、ボロボロの飛行長靴でやっとの思いで帰国した。

帰国した彼らにはそれぞれ厳しい現実が待っていて、黄君は11年間の島流し、頼君は空軍に入り、後年空軍司令官となったと聞き知った。

お詫び：復員の朝、最後の訓辞をした教官が、中村大尉だったのか小林大尉だったのか判然としない。誠に申し訳ないが、80年の歳月が私の記憶を奪った。どうぞ、ご容赦を。